主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	坂井　利彰

主 論 文 題 目：

世界における男子プロテニス界の構造と日本人選手の強化策

（内容の要旨）

本研究は、世界ランキング 100 位内にランクインする日本人のプロテニス選手を継続的に輩出させることを目指し、男子プロテニスツアーの構造を明らかにした上で、選手の強化策を提案することを目的としている。特に日本国内で育成が可能な“晩成”の選手に着目し、男子プロテニスツアーのデータベースを基にした計量分析、さらには選手および関係者への半構造化インタビュー手法を用いて検討を行った。

第一に、男子プロテニスツアーの構造的な特性を明らかにした。世界のトップテニスプレイヤー411 名を対象に、100 位にランクインした年齢が 20 歳以下の選手を「早熟型」、21 歳以上の選手を「晩成型」として分類し、早熟型と晩成型の比較分析を行った。その結果、早熟型は晩成型よりも生涯の最高ランキングが極めて高く、その要因として男子プロテニスツアーのポイント制度の構造が早熟型に有利に働いていることが明らかとなった。さらに 773 名の選手の年齢に応じたランキング推移に基づき、各年齢時のランキングに応じた目標ランキングへの到達率を網羅的に求め、ランキング推移表を作成した。その結果、晩成型の 30 位到達割合が極めて小さいことが明らかになった。

第二に、東アジアの晩成型 4 選手を対象に、ランキング推移や育成環境についてのケーススタディを行い、早熟型の構造的な優位性を踏まえたときに、いかなる戦略をとるべきかを検討した。その結果、晩成型選手がポイントを獲得しているのはチャレンジャー大会であり、グランプリ大会への出場数を増やすことはランキング下げる要因となっていることが明らかになった。

最後に、日本人晩成型選手の強化策を提案した。身体的、地理的、構造的に不利な状況にある日本人晩成型選手は、ハードコートであるアジアでのチャレンジャー大会に集中して出場することが最も効率的なポイント獲得法となる。さらに、日本の晩成型選手はランキング推移表に基づいて 19 歳、22 歳、25 歳という区切りにおいて、ランキングの短期目標を設定することが重要となる。さらに“チーム日本”として日本のテニス関係者が取り組むべき課題として、アメリカの大学育成モデルの採用、NTC が担うべき海外とのハブ機能の活用、国際大会の自国開催の三点について提案行い、日本人選手にとって負担の少ない日本を本拠地とすることと、“世界のテニス”とのつながりを保ち続けることの重要性を述べた。

キーワード：トップスポーツマネジメント、テニス、晩成、強化指針、ランキング